

菅田慶信著『中世奥羽の民衆と宗教』

安藤 弥

一

評者が、本書の著者菅田慶信氏の研究を知ったのは、大谷大学（京都）の大学院勉強会で「地域と真宗」（二〇〇〇年度前期）をテーマに決めた後、東北地方を担当した研究会員の一人が参考論文を博搜する過程で青森県史研究に掲載された菅田論文（本書第一部第三章）を発見し、それを評者に教えてくれたのが最初であった。初めて触れた奥羽本願寺教団論に衝撃を受けたことを覚えている。

次に菅田氏の研究が評者の前に表れたのは、真宗大谷派の二〇〇〇年度夏安居において大谷大学教授大桑斉氏が『蓮如上人遺徳記』読解」を講義する中で菅田論文（本書第三部第一章）を「論は粗いがこの民衆神学という視座は私とほぼ同じことを考えている」とそのねらいを評した時のことであった。この時には既に購入してあった本書をようやく本格的に開き、本願寺教団における門跡成や善知識信仰を研究の一課題とする評者は再び衝撃を受けることになる。

しかしながら評者自身、まさか本書の書評・紹介を引き受けることにならうとは思ってもよらなかった。これは弘前大学の長谷川成一教授のご高配によるものであり、執筆機会を頂いたことに感謝している。

少し個人的な内容で前置きを述べたが、これが評者と本書、そして本書評・紹介の関係性である。以下にまず、本書の構成を掲げてみよう。

序論（新稿）

第一部 北方史のなかの宗教

第一章 国家境界の守護神（一九八三年）

第二章 北方史のなかの中世羽黒山（一九九五年）

第三章 蓮如本願寺教団の蝦夷・北奥布教（一九九九年）

第四章 戦国期奥羽の本願寺教団

― 移住・浪人・往来の視座から―（新稿）

第二部 都鄙往来のなかの宗教と領主

第一章 都鄙往来のなかの一宮祭祀（一九八六・一九九一年）

第二章 大田文と国衙の所領構成（一九八〇・一九八二年）

第三章 国衙在庁官人と起請文（一九七八年）

第三部 中世の民衆と宗教

第一章 中世民衆神学の視座（一九九四年）

第二章 生身仏と夢告の民衆神学（一九九七年）

結語（新稿）

すべての論文が初出時のものに加筆され、論旨の統一が図られ、序論・結語に明確に示された視座のもと、みごとに再構成されている。著者のたゆまない研究姿勢のあらわれであろう、まず敬意を表する。また、各論文最後に簡条書きで懇切丁寧に記された論旨の要約が内容理解に甚だ利便であり、とても印象的であった。しかし、もちろん本書は隅々まで熟読すべき論点に溢れていて、そして評者の力量ではそのすべてを發

見し論ずることはできないだろう。ここでは、評者からみた本書のキーワード「宗教」「地域」「交流」「民衆」を手がかりに簡単に内容紹介をした後、いくつかの点について述べてみたいと思う。

二

「中世社会は、現代に住むわたしたちの想像をはるかに超えた重厚なる宗教的世界に満ち溢れていた。」と冒頭から鮮烈に語り出される序論では、「宗教」への問題意識を確認した後、黒田俊雄氏の「顕密体制」論とそれをうけて展開した研究史を整理する。一国史観の克服、地域という視座、領主制とのかかわり、生活史とのかかわり、民衆と宗教との関係、中世後期宗教史の論点、の六点を深めるべき課題として提示し、本書の視座を(1)地域社会の歴史的發展に宗教がどう関わってきたか、(2)地域社会の宗教のありかたと地域の政治集団とのかかわり、(3)顕密仏教を徹底して民衆の論理で問い直すこと、と設定する。

第一部は中世奥羽における宗教の展開を、国家辺境であるとともに北東アジア世界の中にあるものとする地域的・政治的状况とのかかわりを重視しながら論ずる。大物忌神社から羽黒山へ展開する奥羽の宗教界秩序とそのなかに参入していく本願寺教団を取り上げている。

第一章では、大物忌神は地域神であるとともに、奥羽という地域の王朝国家における境界性や、神自身の触穢に関わる性格から「国家辺境の守護神」の性格を持った。十世紀には秋田城を中心とする北方支配の強化に伴ってその役割を終え、そして在地領主制の確立によって勤農神の

性格が付与され、式内社から出羽国一宮へ展開したとする。

第二章は、大物忌神社にかわり北方宗教の中心となる羽黒山の「縁起」には、聖徳太子信仰、善光寺信仰とともに、海民の崇敬を集めた妙見菩薩、夷狄「調伏」の性格を持った軍荼利明王が強調される。その背景には鎌倉幕府禅密体制や室町幕府体制のネットワークとの関係があり、羽黒権現は蝦夷執行沙汰人安藤氏の守護神的役割を果たしたとする。

第三章では、蓮如教団は「夷浄願寺」を橋頭堡に蝦夷・北奥への布教を開始、「夷」を冠した寺院は奥羽教団の中核であったとする。また「海の有徳人」や蝦夷沙汰執行人湊秋田家と流通・人的交流の面で密接に関わりあつて展開した奥羽教団は、本願寺教団全体においても、御文や『天文日記』に表れる奥羽真宗寺院の存在、一家衆寺院や下間氏との関係を示唆する寺伝の存在などから、大きな位置を占めたとする。

第四章は、「奥州此(斯)波郡平沢河原道場」に明応八年実如下付の「方便法身尊号」(金泥六字名号)の存在や、蓮如による浄祐(斯波郡善証寺)叱責事件の再検討から奥羽教団と本願寺の関係を考察する。また奥羽真宗寺院と室町幕府京都御扶持衆の関係を論ずる。陸奥から出羽へと移動した真宗寺院の存在を指摘しつつ、奥羽本願寺教団は「移住」者・「浪人」を組織し、既存の念仏信仰集団と交流しつつ奥羽在地社会へ浸透していくとする。

第二部は本書中で比較的古い初出年次を持つ論文群であり、第一・三部に比べれば実証面に比重を置いた手堅さが目立つ。

第一章は、地域社会における「宗教的な場」として一宮を取り上げ、そこで行われる神楽などの儀礼には、都鄙往来による文化的交流の成果

が取り入れられたとする。そしてその一宮祭礼はさまざまな封建領主層が身分秩序の確認をする儀式の場であり、国衙と密接に関わって一国の中核的「都市的な宗教空間」であったとする。

第二章は、国衙領世界の実態について検討したものの。大田文に記載される公田Ⅱ国衙領の所領構成とは言いえないことを膨大な免田の存在、また大田文作成における政治的作為を指摘する事で示す。次に免田こそが国衙領所領構成に大きな存在であり、国衙在庁官人・供僧・神官らの強い地縁的結合の場であったとする。

第三章では、鎌倉期国衙における公領内の紛争解決には留守所裁許が多見され、また目代が重要な役割を果たしたとする。そして国衙を中心とする在地秩序は、「王都の領主」からの一方的な起請の押し付けではなく、「在地領主」・百姓らの主体的決断と自己呪縛があつて、この相関により形成されたことを、特に重源の起請文をめぐる分析から指摘する。

第三部は、徹底的に中世民衆の宗教体験について追及しようとした野心的な二論文で構成される。

第一章では、斎藤利男氏の方法をうけて中世民衆神学論を提起する。生身仏信仰・代受苦信仰を論じて、民衆を救済する神仏は、民衆の苦難の中にもあつて民衆と人格的關係を結んでいたとする。また中世国家支配・顕密イデオロギーの呪縛を糾弾する民衆の「恨」は、その克服によつて衆生の救済として「昇華」されていくとする。

第二章は、中世民衆信仰における生身仏の意味を問う。生身仏と人間との人格的關係は、中世仏教の根底に脈々と流れ続けたものであり、例えば法然と親鸞の關係もそれとする。苦難の民衆は神仏すらも「恨」ん

だ。その民衆の主体的な宗教的問いかけにより仏神は夢告というかたちで救済を提示するものとする。

結論では再び「地域」の視座を強調し、本書の論点を再整理する。

三

本書のさまざまなテーマ・論点のなかで「宗教」が第一にあることは、本書題から三部構成の題目すべてにその語が配され、内容に貫徹していることから明らかである。著者の「宗教」に関する問題意識は、序論冒頭において簡潔に言い尽くされている。本書で言う「宗教」とは、いわゆる「宗派」的理解から来る個別教団論でもなく、あるいは経済至上主義的な形骸論でもなく、人間の思惟とその社会的表象（としての各宗教の実態）の総体、とでも言えるだろうか。この点、宗教史の方法を模索する評者にとつても大きな示唆を得たものである。

次に「地域」について。本書の地域論は、一国史観のアンチテーゼという域を超え、周縁論を意識することにより翻して全体性に迫るものになっている。第一部に見えるように奥羽を国家的周縁であるとともに世界的地域として把握する方法、第二部に見える在地秩序の心性を掘り下げる方法などを備え、更に奥羽に徹底的に根付いた著者の研究成果は、近年「周縁から見た中世日本」（講談社『日本の歴史』十四、二〇〇一年）を問題とする研究動向の中でも確たる位置を占めるべきものではないだろうか。

「交流」も近年の都市・交通・流通史の動向に沿っているが、特に

「移住」「浪人」「都鄙往来」などのタームからうかがわれる人的交流の重視が本書の特徴である。本願寺教団の教線発展に関し「海の有徳人」の移動が深く関係（というより同体なのであろう）したこと、京都と奥羽の文化的交流など古くからある論点に新しい息吹を与えている。ただ「蝦夷」など北方世界との「交流」のほうは具体的にどうなのであろうか。内と外との「交流」を併せたところに奥羽の地域像があるのでないだろうか。

主に第三部に描かれる「民衆」思想論、いわゆる民衆神学の視座がまた本書の大きな魅力である。特に顕密体制論においては支配イデオロギーとしての宗教に呪縛されるしかない民衆像を一八〇度転回させ、あくまで人間の主体的な宗教意識として捉え、現代の我々に回帰されるべき問題性を含ませるところは、方法的に超時代的なところにリスクも感じられるが、今後、議論を深めていきたい問題である。ところで本書で言う生身仏は説話・物語にあらわれる権化（仏菩薩が衆生済度のため人間の姿をかりて世に出るもの）譚を中心に論じているが、それと特定の個人を生前あるいは没後に「生き仏」として崇拜する民衆信仰・祖師信仰と同じでいいのか、あるいはもう少し整理した分析が必要ではないのか、このあたりは、今後、課題になるように思われた。

最後に評者の問題関心から本願寺教団関係について一言。近年、北陸沿岸づたいの北方への真宗の伝播が伝承にとどまらないことが、「河内国古市菅田」の文言を裏書に持つ方便法身尊像（秋田淨応寺蔵・本書第一部第三章）の発見に象徴される精力的な史料調査の結果、明らかになってきた。これらの史料を駆使したところが、本書が初の本格的な奥羽

本願寺教団論として評価できるゆえんである。ただ本書の行論で違和感があったのは、由緒書の内容をそのまま史実とするような論調が少し多いことであった。確かに由緒書の内容を「荒唐無稽なもの」と一笑に付すことはできないが、符合する部分があるからすべてを信用することもできないのであり、近世以降の史料を用いて遡及考証する際にはやはり慎重な姿勢が必要である。由緒書成立の背景を探る必要もあり、これについては、東本願寺教団の体制化が進む宣如期（近世初期）における奥羽教団の実態、また蓮如二〇〇・二五〇回忌以降、真宗典籍刊行ブームにも乗って見られる「蓮如上人」伝説の爆発的な展開（近世中期）の影響などに注目する必要を指摘しておきたい。近世・近代まで見通した奥羽真宗史の構築にも期待してみたいのである。

四

以上が京都の一読者による本書の読後感想文である。至らなかつた点については著者はじめ諸賢のご寛容とご指導を頂ければ幸甚である。本書は、奥羽という地域に根差し、宗教への真摯なまなざしを持った著者の渾身の力作と思われる。これを嚆矢に新たな宗教史の一論点が築かれていくことを予感するのは評者だけではないだろう。

（A5判、三三八頁、吉川弘文館、二〇〇〇年七月刊、七〇〇〇円）
（あんどう・わたる 大谷大学大学院博士後期課程）